

# 景色をはぐくむ 庭師が伝える

## 渉成園の魅力



庭園ガイドによる普及啓発活動

渉成園は、約一万六百坪の広さを有し、国の名勝に指定されています。

この広大な庭園を維持・管理していくには、専門的な知識と技術はもちろんのこと、庭園に対する情熱や、長年にわたる知見の蓄積もまた重要になってきます。

そうした知識、技術と情熱をもって、長年渉成園の維持・管理に尽力してこられたのが、「植彌加藤造園株式会社」の皆さんです。このたび、その植彌加藤造園さんから、日本庭園の魅力と渉成園の特色についてご寄稿いただきました。

松の剪定(葉むしり)の様子

### 1 お庭をはぐくむということ

私たち植彌加藤造園は、真宗本廟(東本願寺)の飛地境内地である渉成園のお庭を日々お手入れさせていただいております。そんな庭師の目線から、日本庭園の魅力、そして渉成園の特色をお話しいたいと思います。

日本庭園には、完成というものはあります。そこにはすごい感動がありますが、それはお庭の完成ではなく、誕生に過ぎません。時を経たお庭には、新しいお庭はない。昔むした岩や、長年雨に打たれた石燈籠の醸し出す美があります。またそこに価値を見出することは日本庭園の特徴ともいえます。日々と長い時間をかけてはぐくまれ続けることで日本庭園らしさが増すのです。そんな人の人生を超える長い間、どうやって一つの庭園をその庭園らしさを失わずに守っていくことができるのでしょうか。ふと考えると不思議です。

この渉成園も約360年もの間、京都の市中の「等地」にありながら奇跡的に残され、はぐくまれてきました。「一体どのようにして、それが可能だったのでしょうか?」

庭をはぐくむために必要なものが3つ

最後に「庭に価値を見出す人々」です。これは現在このガイドブックを手に持っているあなたも、そのお一人です。古い庭を大切にしたい、またその価値を守っていきたいと思う人々が現在にいなければ、どんなに技術や資金があつても、庭は存在意義を見出されず、消えて無くなってしまいます。それは、渉成園のように国の名勝に指定され、文化財保護法で守られている庭園に限らず、すべての庭園に言えることだと思います。

この渉成園は、これら3つの要素が満たされ続けてきたために、現在までその姿を残すことができているのです。

### 2 渉成園の育成管理

それでは、渉成園のアイデンティティは何でしょう。

渉成園は国の名勝に指定されています

ので、その指定理由がアイデンティティに当たると考えてよいでしょう。昭和11年の指定理由には「池畔二縮遠亭漱枕居、傍花閣等茶湯関係ノ建築ヲ配置シタル外池ノ北岸ヨリ中島ニ架シタル回棹廊ノ如キ何レモ江戸時代初期庭園ノ特色顯著ナルモノト云フヲ得ベシ」(抜粋)と書かれています。

渉成園は、江戸時代を通じて東本願寺と徳川家との強い結びつきの中で、歴代宗主の隠棲の地として、また文化人が集う交流の場として利用されてきました。そのため、指定理由にあるように、庭園内には要所にお茶の文化に関する建築が配され、当時の情景を今に伝える庭園として名勝指定されています。

例えば迎賓施設として花ひらいた文化政時代には、漢学者賴山陽が渉成園記(文政10年・1827)を残し、庭園内13ヶ所の名所である「渉成園十三景」をめぐり景色を楽しんだことが記されています。その楽しみ方は当時の文

あります。それは「庭のアイデンティティ(独自性)」、「庭をはぐくむ技術」、「庭に価値を見出す人々」です。

「庭のアイデンティティ(独自性)」は、例えばこの渉成園でいえば、東本願寺が真宗の教えに基づいて行った庭園内の配置や、歴代の使用者が持ち込んだ茶の湯の要素や歌の要素などです。それはこの庭の、この庭らしさともいえるもので、はぐくむべき価値の根幹となるものです。

「庭をはぐくむ技術」は、アイデンティティを実現するために意図した通りに樹木の剪定をしたり、適切な掃除をしたり、また季節や時代に応じて演出をしていく庭園管理の伝統的な技術のことです。

庭園を大切に守るために、現在までその姿を残すことができています。

#### 植彌加藤造園

創業嘉永元年(1848)。東本願寺 渉成園、南禅寺、智積院、清水寺、無鄰菴、對龍山莊など文化財に指定された名勝庭園の育成管理を数多く手がける。近年では伝統に裏打ちされたモダンなデザインの作庭を国内外で行う。指定管理者として「庭に集い、庭をはぐくむ」をキャッチフレーズに総合的に日本庭園の魅力を伝える運営も行っている。

